公立中学校における特別支援学級での英語科授業実践
―生徒Ａの学習意欲の変容を通して―

大塚　恵理
（京都市立近衛中学校・京都教育大学大学院教育学研究科　修了）

Practice of English Classroom Teaching in Public Junior High Schools for Students with Special Needs
－Through the Transformation of Student A's Motivation to Learn－

Eri OTSUKA

2024 年 9 月 10 日受理

抄録：令和５年度に京都市内の公立中学校の特別支援学級での１年間の英語科授業実践から得られた成果をもとに論考する。特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編を参考にしながら、一人一人の生徒に寄り添い「特性を生かしたカリキュラム」の開発により「個別最適な学び」が創出され、授業実践を通して、生徒たちがコミュニケーションの楽しさやよさを感得する様子を確認した。また、生徒Ａの変容からは、英語教育を通して学習意欲や自己肯定感の高まり、またコミュニケーション能力の萌芽を確認した。

キーワード：特別支援学級、英語教育、特性を生かしたカリキュラム開発、自己肯定感

Ⅰ．はじめに

全国の多くの公立中学校には特別支援学級が設置されている。京都市立学校でもほぼすべての中学校に特別支援学級（京都市では育成学級と呼ぶ）が設置されている。特別支援学級での教科指導は、特別支援学級担任だけではなくその学校の教科担当教員が担当することが多い。しかしながら、教科担当者の多くは特別支援教育に関する専門的な知識を十分に持っておらず、また特別支援学級での学習指導においては検定教科書のような統一した教材やカリキュラムがあるわけではない。その結果、多くの教員が戸惑いと困難を感じながら指導にあたっているという実態がある。本稿では、筆者の授業実践から一つのカリキュラム開発例を提案するとともに、ひとりの生徒に着目し、Ａの学びの変容を通して特別支援学級での英語教育の可能性について述べたい。

1．生徒につけたい力―生きて働く「ことば」としての英語

筆者は令和５年度に特別支援学級の英語科授業（週２時間・７０ｈ）を担当した。前述のように、特別支援学級での英語科授業において、多くの教員がその指導内容や方法に困りを感じている実態は散見される。例えば、検定教科書の英文にカタカナのルビを打ってそれを読ませたり、アルファベットを何度も繰り返し書き写す作業のような学習活動に終始している授業は多くみられる。あるいは毎時間ビンゴゲームで楽しく過ごすだけの活動に終始するような教員も存在する。しかし、はたしてそのような授業は「ことば」としての英語を学習・習得したと言えるのだろうか。カタカナがなくなったらたちまち読めなくなる、アルファベットの形は覚えたが、それらを使った言葉を読んだり書いたりすることができないのであれば、その学習は生徒たちのためになると言えるのだろうか。特別支援学級だからこそ、彼らが生活のなかで実際に使うことができる、つまり生きて働く「ことば」としての英語授業実践を展開することが求められているのではないかと考える。そのためには、彼らの実態に即したカリキュラム作成が必要だと考える。そこで、筆者は生徒の実態を観察しながら、カリキュラムの開発に取り掛かることにした。

（1）特別支援学級での生徒の様子

本学級には６人の生徒（３年生２人、２年生１人、１年生３人）が在籍していた。異学年編成の学級のため、

３年生が１、２年生の面倒をみたり手助けをする場面は日常的に見られた。６人中５人が ASD 傾向をもつ生徒であった。生徒たちの様子を丁寧に観察したところ、彼らは①動画や音声を用いた活動を好む、②ダンスや手遊びなど、体を動かすことを好む、③同じ活動を繰り返すことを厭わない、④ゲーム性のある活動を好む、などの特徴が見られた。

６人の生徒のうち、特に１年生の生徒Ａに着目した。ほかの５人の生徒たちとは異なり、Ａは日本語（母語）でのやりとりは単語での発話が多く、普段は自分から言葉を発することは非常に少ない上に、声をかけられてもなかなか言葉が出ない様子がみられた。話しているときも、小さな声で抑揚が少なく、一本調子の話し方という特徴があった。挨拶などの言葉による対人コミュニケーションはやや苦手で、こちらから挨拶をすると、逃げるように速足で立ち去ることが日常であった。また音に過敏なところがあり、聞きなれない音がするとすぐに耳をふさぐ様子がみられた。一方で、文字を書く時には一画一画「シューッ」という声を出しながら書いたり、本人が慣れない場面や落ち着かない時には常に小さな電子音にも似た高音を発している。彼が異言語である英語との出会いを通してどのように変容するのかも合わせて丁寧に見取ることとした。

（2）特性に留意した指導方針

これらの生徒の様子から、本特別支援学級での英語科授業の指導には小学校の英語教育で指導する際に考慮すべき内容が参考になると思われた。井狩(2010)は、小学校での指導では「英語の中のさまざまな規則に気づかせるように工夫しながら、繰り返し練習を取り入れる」ことや、「体を動かしたり、五感を使ったりして、意味を理解する基礎となるさまざまな体験を通して言葉を覚えていくように工夫する」ことを提案している。これらの活動は本学級の生徒の特徴を照らし合わせてみても、十分援用する意味がある。また、異学年編成の本学級ではヴィゴツキーの発達の最近接領域（ZPD）の考え方を生かし、他者とのかかわりを通してその能力を引き出す工夫も取り入れることができると考えた。

一方で、月森(2008)は、特別支援教育における支援のポイントとして、①パターン化、②予告、予習、③肯定的に、④構造化、⑤視覚化、⑥具体的に、⑦個別的に、⑧言語化、の８項目を示している。これらのことから英語科授業を考える際には特に、①パターン化すること、②学習の先の見通しを立てるために事前に予告すること、③動画やスライド、写真、絵カードなどを多用した視覚化、を意識した授業展開が重要であると考えた。

松本ら(2015)は、ASD 児・者がテレビ・映画のキャラクターをマネできる理由として、「彼らにとって強い興味関心を引く」もので「繰り返し同じパターン」が示されることにより、連合学習的に「パターンを検出し模倣」するようになることを挙げている。このことから、社会的相互作用に困りのある生徒にとって動画などのメディアコンテンツを繰り返し視聴することは言語学習・言語習得に有効な手段の１つになりうるのではないかと考えた。ICT 機器の利活用が進む令和の学校教育環境のもと、これらの機器を生かした英語教育の可能性は、通常学級だけではなく特別支援学級でも広く応用できるのではないかと考えた。

2. 学びの特性を生かしたカリキュラム設計

公立中学校に設置されている特別支援学級での学習指導は、中学校学習指導要領に準拠することを原則とする。しかしながら生徒の実態を考慮したときに通常の学習指導要領に応じた教育活動は困難である場合は、特別の教育課程を編成することができる。そこで本実践では特別支援学校の学習指導要領を参考にすることとした。

「特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編」（文部科学省）のうち、中学部の外国語科の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」として次の３点があげられている。

（１）外国語を用いた体験的な活動を通して、身近な生活で見聞きする外国語に興味や関心をもち、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
（２）身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝えあう力の素地を養う。
（３）外国語を通して、外国語やその背景にある文化の多様性を知り、相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。　（下線は筆者）

この学習指導要領の目標をもとに、英語科の授業では「体験的な活動を通して」「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことを中心に据えて、「外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝えあう力の素地」や「相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことができる学習活動を選び組み立てることとした。コミュニケーション能力とは、つまりは人とかかわる力であり、それは英語教育を通して生徒たちが人と関わり合うことのよさや楽しさを実感しながら身につけてほしい資質・能力のひとつだと考える。ただし、文字については、本学級生徒の実態を考慮して小学校学習指導要領を参考に、「何度も聞いたり話したりしてその音声に十分に慣れ親しんだ単語」を「推測しながら読んだり」するための、いわゆる補助的な役割として提示することとした。

また、生徒の実態を踏まえて、本学級での英語科授業は小学校外国語科で大切にされている指導手順を参考にしながら、彼らが安心して楽しみながら学習活動に取り組めるよう、また興味を持って意欲的に取り組めるように身近なトピックを中心にした学習活動を計画した。さらに、授業での学習を中心に学習内容や英語表現の定着を目指すことを目標に、おおむね１か月（８時間）を１単位とする単元をもとに年間指導計画を立てた。（表１）

表１　令和５年度特別支援学級（育成学級）年間指導計画

	学習項目	もっと英会話たいそう	Pre-Kiso	その他
4 月	colors Alphabet	1 Ready, get set, go!	Episode 1-4	
5 月	shapes colors and shapes	1 Ready, get set, go!	Episode 5-8	YouTube Tangram
6 月	Alphabet writing 定期テスト	1 Ready, get set, go!		YouTube
7 月	Numbers big numbers	2 Knock, knock	Episode 9-12	YouTube
8 月	big numbers	2 Knock, knock		YouTube
9 月	Map symbols and City facilities 定期テスト	2 Knock, knock	Episode 13-16	YouTube
10 月	time Daily routine	3 Yes, please	Episode 17-20	YouTube
11 月	Daily routine 定期テスト	3 Yes, please		YouTube
12 月	Month of the year Christmas English	3 Yes, please	Episode 21 (旧版　どこの料理？)	YouTube
1 月	Month of the year Body parts	4 Who’s next?	Episode 22-24	YouTube
2 月	Brown Bear Brown Bear What do you see? 定期テスト	4 Who’s next?		YouTube
3 月	絵本の音読発表会	4 Who’s next?		

（1）使用教材について

特別支援学級での授業を行う時に、教材の選定は大変困難である。指導する教員のもっとも大きな困りの一つはここにあると思われる。今回の実践で使用した教材のうち、動画や音声を多用し、視覚化を意識した教材をいくつか紹介したい。

まず、mpi 社の DVD「CatChat 英会話たいそう Dan☆Sing☆lish」を使用した。この教材のよさは「日常の英会話でよく使う『基本フレーズ９６』とジェスチャーを①ダンス②アニメ③スキット（寸劇）の３つの方法で繰り返し視聴する」ところにある。（下線は筆者）これは、「体を動かしたり、五感を使ったりして、意味を理解する」ことを目指す授業に適しており、パターン化や視覚化もうまく工夫されている。

次に、NHK で 2011 年度に放送された「プレキソ英語」の動画を使用した。これは「2011 年度より小学校の新学習指導要領が全面実施され、小学５・６年生の「外国語活動」が必修化されたことを踏まえ、子どもたちに良質な英語に触れる機会を提供する小学校５・６年生向けの英語番組としてスタート」したもので、「英語の“音”に慣れることを目的に、毎週１つの英語表現を中心に学ぶ」1 単位 10 分の「オールイングリッシュプログラム」である。これは筆者がテレビ放送を毎週録画しておいたものである。NHK for School にも問い合わせたが、残念ながらこの番組のアーカイブは残っていないということだった。この教材の最大の特徴は日本語を介さないオール・イングリッシュ・プログラムであるという点や海外でのロケが多く、街並みや風景のみならず多様なネイティヴ・スピーカーのリアルな英語を聞く機会が多いことである。この教材を使用することで異文化理解に役立つのはもちろんであるが、それ以上にトップダウンの英語インプットも目指している。生徒たちには１つ１つの英単語の意味を理解することよりは「こんなことを言っているのかなぁ」「こんな内容の話かなぁ」とおおまかに内容をつかませることを意識した。また、このプログラムは４回分ごとに１つのテーマが設定されており、テーマに関連した番組内のアクティビティも併せて授業で取り組ませることができた。

さらに、「プレキソ英語」で出てきた英語表現に慣れ親しみ、定着をめざす学習活動を補完する目的で YouTube 動画も使用した。動画を選ぶ際は、海外の ESL のために作成された動画を中心に選んだ。母語である日本語を介さず、音声・表現など、よりオーセンティックな英語表現に触れさせるためである。また、生徒のタブレット端末に動画の URL を送ることも可能であるため、家庭での学習に利用することもできる点が有効である。

年度末には、Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?の CD 付絵本（mpi 松香フォニックス）を使い、絵本の音読に取り組ませた。絵本の音読は少し難易度が高いかとも思ったが、「発表会をしよう」という目的を予告し、CD 音源を使いながら、自作スライドをみせて何度も繰り返す練習に取り組ませた。

以上のような音声教材・視覚教材を複数組み合せることにより、生徒たちが飽きずに反復学習に取り組めるよう心掛けた。また必要に応じて追加の教材を補いながら、1 年間のカリキュラムをもとに授業実践に取り組んだ。

Ⅱ．授業実践と生徒の様子

結論から述べると、生徒たちは１年間、楽しみながら英語学習に取り組むことができた。また授業が進むにつれて一つずつ「できる」ことが増える喜びを感じながら「次は〇〇が言えるようになりたい」と意欲的に学習活動に取り組んでいた。指導者の立場からは、年度初めに年間指導計画を策定したことで、場当たり的な授業をすることもなく、また「次、何をしよう？」という不安感に駆られることからも解放され、１年間の見通しを持って授業を実施することができた。指導者に心の余裕ができることもカリキュラムを策定することの利点であると感じた。1 年間の実践のうち、７月から８月に実践した「Big Numbers」と、2 月から 3 月に実践した「絵本の音読と音読発表会」を紹介する。

1.　７～８月実践「Big Numbers」

この単元では数字の学習に取り組んだ。初めは１～100 まで言えるようになればいいと考えていたが、最終的には生徒の意欲にこたえる形で 1,000,000（million）や 1,000,000,000(billion)まで取り組むことができた。

（1）「数字を読む」必然性を創出するために

そもそも、なぜ数字を言う必要があるのか？―この問題を解決するために CLIL の教材を参考に、初めは身近

なものをメジャーで測り、それを英語で言う活動に取り組んだ。教室にある机や椅子はもちろんのこと、自分の頭の周囲や腕の長さ、ひいては教室の黒板や窓にいたるまで、生徒たちはメジャーで次々に測ってそれらを英語で言う練習をした。生徒Bが黒板を測ると220㎝であった。その時の指導者（筆者）と生徒のやりとりから、彼が「200」という数字に出会った瞬間を紹介する。

指導者「黒板って何センチなの？」
生徒B「２２０ｃｍだった。先生、２２０って英語で何て言うの？」
指導者「そうね…。１００は何て言うんだっけ？」
生徒B「one hundred」
指導者「そうだね。でも２００だから…」「２は何て言うの？」
生徒B「Two」
指導者「そうね。じゃあ、２００は？」
生徒B「えー？わからん。」
指導者「そんなことないよ。『に』『ひゃく』だし…？」
生徒B「えー…two … hundred？」
指導者「そう。Two hundred だよ。」
生徒B「そうか！」
指導者「じゃあ、２２０はどう言ったらいいかな？」
生徒B「Two hundred … Twenty?」
指導者「そう。two hundred twenty でいいんだよ。」
生徒B「おお！そうか！じゃあ、３００は three hundred?」
指導者「そうそう。これで１００の位も英語で言えるね！」
生徒B「よっしゃぁ！」

このやりとりのなかで、生徒Bがこわごわ「two…hundred」と口にして、200という数字に出会った瞬間、「そうか！」という声とともに彼の顔がパーッと明るくなり笑顔が広がったのが見て取れた。また「よっしゃぁ！」という声には自信がみなぎっていた。新しい知に出会う喜びというのはこんなにも大きく美しいものなのかと改めて気づかされるとともに感動の瞬間を生徒とともに共有でき、指導者としても大変印象深い場面であった。

（2）さらに大きな数字との出会い

１～100までの数字についてはYouTubeの動画を活用して習熟を図ったのだが、さらに大きな数字を言うきっかけを作るために、自作のスライドを使用した。あべのハルカスや東京スカイツリー、世界一の高層建築物であるブルジュ・ハリファをはじめ、富士山や世界最高峰のエベレスト、鴨川や日本最長の河川である信濃川、世界最長河川のナイル川、ひいては京都市の人口や日本の人口、また世界の人口などをクイズ形式で出題することで大きな数字を英語で言う必然性を持たせた活動に取り組ませた。既有の知識も活用させながら、身近な京都に関連することや日本国内のみならず、世界にも目を向けさせることで、大きな数字を読む楽しさや読めたときの達成感を味わわせることができた。生徒たちはこの活動が気に入った様子で、自ら社会科の地図帳を使って「〇〇山の高さは？」や「〇〇川の長さは？」「〇〇の人口は？」とお互いにクイズを出し合う活動を生み出していた。彼らのクリエイティビティに驚かされた一場面であった。

（3）大きな数字の定着のための活動

数字を読むことには慣れてきたので、今度は聞いて理解する活動も取り入れることにした。インターネットで検索すると、ESLの学習用に大きな数字を扱うビンゴシート（図１）があったので、それを使ったビンゴゲームを取り入れた。初めはゆっくり、3回くらいくり返しながら取り組んでいたが、慣れてくると、3桁や4桁の数字はもちろんのこと、5桁でも1回で聞き取り正解を選ぶことができた。生徒たちは「こんな大きな数字を英語で聞き取ることができる」という自分たちに満足げな様子であった。当初は100くらいまで言えればいいだろう

と筆者は思っていたが、指導者がリミットを設定するのではなく、生徒たちの興味を引き出せば、どんどん学びを広げていけるのだと生徒たちの意欲やがんばりから気づかされた。

図１　実際に使用した「ビンゴシート」

B	I	N	G	O
999	1 891	8 704	6 021	117
9 999	567	2 560	3 005	614
5 694	3 014	10 000	9 922	892
5 067	1 002	3 333	309	495
2 536	1 750	2 212	5 341	913

2. ２月～3 月実践「絵本の音読と音読発表会」

１年間の学習の集大成として、絵本の音読に取り組むことにした。絵本は「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」（Bill Martin Jr. 作　Eric Carle 絵)を選んだ。この絵本を選んだ理由は２つある。まず、小学校の外国語活動などでもよく使われている絵本なので、生徒たちは話の内容を知っているであろうこと、もう一つは、絵本の特徴である繰り返し表現が多用されていることや、これまでに学習した色、動物などの表現がたくさん扱われている点である。取り組みの最後には音読をタブレット端末を使って録音し、発表会をすることとした。生徒たちには、最後に「発表会をする」というゴールを示して学習活動に取り組ませた。

（1）教材としての「絵本」の活用

外国語教育にかかわらず、絵本を学習教材として活用することは学校教育だけではなく、家庭教育でも頻繁におこなわれているところである。外国語学習における絵本活用の効果について、田縁(2017)は絵本の学習教材としての利点として、読み聞かせという音声のインプットや音声では理解できない語句や表現を絵によってその意味と結びつけることを挙げている。また、表現のくり返しがあることや子どもにとって身近な語彙を扱っている点などもその良さである。特別支援学級での英語科授業実践においても、絵本はくり返しによりパターン化されている点や絵による視覚化、また使われている語彙の親しみやすさや音のリズムの心地よさなど、特性に寄り添う優れた教材の一つとして活用できると考えた。

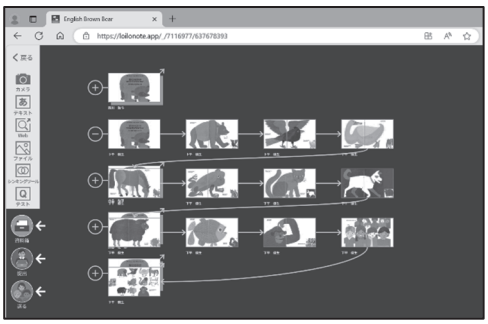
（2）絵本付属の CD の活用

毎回の授業では、絵本に付属する CD を活用した。まず、モデル音読を聞き、指導者と一緒に音読する。つぎに、ビートの入った CD 音源を活用してチャンツのようなリズム音読に取り組む。最後にビート音だけの音源で自分で音読をしてみる、と少しずつ難易度を上げながら取り組んだ。また、音読練習時には、主に指導者の作成したスライドを見ながら取り組ませた。予算の都合もあり、１人１冊の絵本は用意できなかったが、絵本のカラフルな挿絵は内容理解にも有効であり、視覚化によりイメージを描きやすいという利点を生かしたかったからである。しかし結果的には１冊の本を「みんなで」見ることで、仲間と一緒に学ぶという学習形態がおのずと生まれることとなった。多様な繰り返し学習を続けることで生徒たちは少しずつ読めるようになっていった。また、最後のページはそれまでのページとは少しリズムが異なるのだが、「ここだけ練習したい」など、自分がまだ達成できていない部分を明確化して練習に取り組むことができた。

（3）学習者用タブレット端末を活用した音読発表会

一般的な「音読発表会」と言えば、みんなの前に立ち、ライブで本を読むという形式でしか実施できなかった。しかしながら、人前に立って一発勝負の発表というのは、緊張を伴い大きなプレッシャーとなる。特別支援学級の生徒たちにとってはなおさらのことである。そこで、今回は一人一人のタブレット端末に練習で使ったスライドを送信し、１ページずつスライドに音読を録音する、という方法で発表会を企画した。（図２）３年生は国語科の授業でもタブレットに録音をする学習活動をしたことがあるということで、手法に慣れていたし、１、２年生もさほど緊張することなく音読の録音に取り組むことができた。録音の良いところは、失敗してもそこだけ録音をやり直すことができる点である。それゆえ生徒たちは納得のいくところまで

図２　タブレット端末に送信された絵本



何度でも録音をやり直すことで作品の完成度を高めていった。録音をするときには３年生が１年生を励ましながら取り組む姿などが見られた。完成した作品は個人のものにはなるが、その過程で生まれた「協働しながらひとつのものを制作する」という体験は、単に英語学習ということだけではなく、彼らがこれから生きていくときに役立つ一つの体験となったのではないかと考える。

（4）発表会の様子

全員の録音が終わった次の授業で発表会を行った。発表順は自分たちで選ばせることとした。生徒たちはそれぞれ、「じゃあ、僕から。」「〇〇君の次がいい」などと順番を選んで、教室の大型 TV にコンピュータをつなげて視聴した。初めは「ちょっとハズイ（恥ずかしい、の意）なぁ」と言いながらも、みんなの発表を楽しみながら聞くことができた。なかには、「僕の録音した声、ちょっとイケボ（イケてるボイス＝いい声、の意）やろ？」など、完成した作品を満足そうに聞き入る生徒もいた。また、十分に発音ができていない１年生に向けて他の生徒から「What do you see? がちゃんと言えてるね」や「Purple cat のところが上手だね」という肯定的なフィードバックが多く聞かれた。３年生ほどすらすら言えていなくても、上級生からの優しい声かけが下級生たちに安心感と満足感を与えていた。動画の発表が終わるたびに温かい拍手が起こり、発表会は無事に終えることができた。発表が終わったあとの生徒たちの表情は、「１冊の英語の絵本をすべて自力で読むことができた」という大きな達成感と自信に満ちあふれた、晴れ晴れとしたものであった。学習内容に関する一人一人の達成感はもとより、クラス全体で「今日はいい発表会ができたね」と感じ合える雰囲気も発表会を成功に導いた要因の一つであったことは言うまでもない。このような学級での温かい人間関係ができているのは、まちがいなく特別支援学級担任の力によるところが大きい。授業は教科担当者だけではなく、学級担任の日頃の学級経営があってこそ成功するのだということも改めて認識することができた。

Ⅲ．成果と課題―まとめにかえて―

１年間の実践を終えて、何にもかえがたい最大の成果は、生徒たちが１年間楽しく英語学習に取り組み、学習内容の定着がみられたということである。ただ単に遊びの延長で「楽しい」のではなく、一つ一つ「できる」ことが増えることへの喜びや、生徒たちが自分自身の成長を手ごたえとして感じてくれていたことが「英語は楽しい」という思いにつながったのだろうと推察する。また生徒たちが授業中のやりとりのなかで学習した英語表現を用いて、「Yes, yes, yes!」と応答したり、内科検診から戻ってきた生徒が、「お医者さんが black circle（聴診器のこと）を体に当ててきた」と言ったり、さらには校外学習で訪れた天王寺動物園の様子を語るときに、「Brown bear はいなかったけど、White bear はいたよ」などと話す様子からも、一定の定着が図られていることも確認できた。生徒たちのこのような姿は、１年間の授業実践を通して彼らが生きて働く「ことば」として英語を学習し、獲得した証左ではなかろうか。このことは、指導者である筆者にも大きな喜びを与えてくれた。特別支援学級での英語教育は一人一人に寄り添うことからスタートするのが大前提である。本実践を終えて、生徒 A の変容を含め、その可能性や課題について以下に述べたい。

1．カリキュラム開発と生徒の学び

今回の実践の鍵となったのは、やはりカリキュラム開発であったと考える。生徒の実態をつぶさに観察し、特性を生かしたカリキュラムを設計することで、生徒たちが無理なく、また楽しみながら学ぶことが可能になった。

表２および表３は１年間のカリキュラムに沿って、生徒が学習した語彙とフレーズの一覧である。英語科の授業は週２回であったが、毎回の学習メニューや進行手順を固定化し、音声をまねたり、ジェスチャーを入れたり、クイズ形式にするなど様々な手法を用いて漆塗りのように何回も何回も繰り返す授業を設計することで習熟を目指した。その結果、生徒たちは学習語彙や表現を聞き取って理解することも絵カードや動画を見て発話することもできるようになっていった。語彙の中には中学校の検定教科書には出てこないようなものもあるが、生活の中でよく見るものや、普段のやり取りで言いたくなるような表現を中心に選定したことで、生徒たちも飽きることなく学習に取り組むことができたのだろうと考える。

生徒たちは、筆者が予想していた以上に多くの語句や表現を学び使えるようになった。特別支援学級は、毎年

異なる多様な生徒が在籍するので、汎用性の高いカリキュラムを作成することは非常に難しいことではあるが、今回の実践が一つの成功例として、多くの特別支援学級で指導する先生方の参考になれば幸甚である。

表２　生徒が学習した語彙一覧

学習テーマ	vocabulary
colors	red, blue, yellow, purple, green, white, brown, black, gold, grey, orange, pink, light blue, light green,
shapes	square, rectangle, triangle, oval, star, rhombus, cube, cylinder, hexagon, circle, sphere,
Alphabet	大文字、小文字 自分の名前
Numbers	1～100
big numbers	hundred, thousand, million, billion
City facilities	school, library, fire station, post office, supermarket, hospital, station,
Time	What time is it? It's ～.
Days of the week	Sunday, Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday, Saturday,
Daily routine	get up, get dressed, have breakfast, brush my teeth, go to school, have lunch, play with my friends, do my homework, watch TV, have dinner, play video games, take a bath, take a shower, go to bed
Months of the year	January, February, March, April, May, June, July, August, September, October, November, December
Christmas	Tree, bell, candy cane, ornament, stocking, lights, toys, snowman, elf, present, Santa Claus, reindeer,
Body parts	head, shoulders, hands, face, fingers, arms, elbow, ears, eyes, chin, nose, mouth, stomach, back, chest, knee, legs, feet, toe,
Brown Bear, Brown Bear, What do you see?	What do you see? I see ～ looking at me. That's what we see.

表３　生徒が学習したフレーズ一覧

もっと英会話たいそう	phrases	
1 Ready, get set, go!	Ready, get set, go!	Are you ready to start?
	Yes, I'm ready.	Hello, how are you?
	I'm good, thank you.	Nice to see you.
	Nice to see you, too.	How was school today?
	It was fun.	Have a nice weekend.
	You too.	See you next week.

2 Knock, knock.	Knock, knock. Can I come in?	Please come in.
	This way, please.	Please have a seat.
	After you.	Watch out!
	That was close.	I'll get it. "Hello."
	"Hello, this is Michael."	Hold on, Please.
	Wow! What a big pizza!	Please help yourself.
3 Yes, please.	Would you like some?	Yes, please.
	No, thank you. I'm full.	Have you finished your homework?
	Yes, I have.	No, I haven't.
	Do you want to come?	Yes, yes, yes!
	Did you bring your umbrella?	You didn't bring your umbrella?
	No, I didn't.	No. What should I do?
4 Who's next?	Are you finished?	I'm almost finished.
	This is easy.	This is hard.
	I'm sorry I'm late.	What happened?
	That's alright.	Who wants to go first?
	We'll go first.	Who's next?
	Let's do it again.	Let's give them a big hand.

2. 生徒 A の学習意欲の変容

先述したように、生徒 A は自らすすんでコミュニケーションを取ることは極めて少ない生徒であったが、授業を進めていく中で、生徒 A の学習スタイルには特徴的なところがあることにも気づいた。新しい単元を導入すると、はじめの３～４回はまったく何も言わないのである。発話を促しても、リピートを促してもまったく何も言わない。一見すると興味がないのか、やる気が起きないのかと心配になるのであるが、5 回目くらいになると、急にどんどん英語を話すようになるのだ。おそらく、自分が新しい英語表現に慣れて自分の中でルールが整理できるまでは自分の中に「貯める」のではないかと考えている。慣れてくれば、他の誰よりも先に答えを言いたくなるところもあるので、授業のなかでは「挙手をする」「順番に発言する」などのルールもあわせて指導した。

Big Numbers の学習をしているときも、初めはまったく英語で数字を言おうとしなかったが、一度インプットされるとその正確性は高く、ビンゴゲームなどではすべて正確に聞き取り、ビンゴが揃うと元気に挙手をして選んだ数字を堂々と読み上げた。自分が「できる」ようになったことには自信をもって発言できるようになり、また自尊心が高まっている様子も、A の表情などをみると明らかであった。

「絵本の音読」の際にも同様の姿が見られた。初めは音読活動にまったく参加していなかったが、このころには筆者も A の学習スタイルであろうと焦ることなく見守っていた。授業の回数を重ねていくと、やはり A は生き生きと音読を始めるようになった。また、授業後も筆者のもとへやってきて、スライドを示してどんどん英語を言うようになった。周りの生徒も A の英語を聞いて「すごいね」「発音うまいね」などとほめるので、A は毎時間授業後にも絵本の音読を披露するようになっていった。

授業中にも A の言動に小さな変化が見られた。授業を始める際にパソコンの接続がうまくいかなくて筆者が慌てていると"What happened?"と言ったり、ゲームを始める際に"Are you ready?"と声をかけると、"No, no, no."と応答する、といった場面が授業が進むにつれて頻繁に見られるようになった。日本語ではそのようなやり取りは出てこないが、学習した英語表現を場面や状況に応じて的確に使えるようになっていたのだ。この様子に他の生徒たちも「A さん、今の使い方うまいね。」などとその使い方を褒めていた。褒められた A も恥ずかしがるこ

ともなく、満足そうな表情であった。この変化は、A の中で英語の語彙や表現が単なる連合学習ではなく、学習した英語表現を「コミュニケーションの道具」として使い始めたことを意味している。英語学習をきっかけに、他者とコミュニケーションをとる楽しさを味わった経験が日本語でのコミュニケーションにも波及し生かされれば、英語教育の役割を一つ果たせたことになるのではないかと考える。

もう一つ、A の大きな変容として、小学校時代からの A の特徴であった、文字を書く時に一画一画「シューッ」という声を出しながら書いたり、授業中に小さな電子音にも似た高音を発していることが英語の授業中には一切なくなった点が挙げられる。「英語の授業中」としているのは、道徳などの交流学級に参加している時には、相変わらず文字を書く時に一画一画「シューッ」という声を出して書いているし、小さな電子音にも似た高音を発しつづけているのである。この違いは、英語科の授業が特別支援学級内での授業なので A が授業中に安心できていることや、自分で「できる」と自信がもてる活動が多いことが理由として考えられる。授業中の小さな成功体験や達成感が自己肯定感を高めて、落ち着いて授業に参加できるようになったための変容ではないかと考えている。

3. 生徒の多様性と指導者の専門性

特別支援学級には、多様な生徒が在籍する。そしてそれは毎年変化するので、「個別最適な学び」となるよう日々生徒を丁寧に見取り、それに応じた不断の工夫・改善が必要である。このことは、特別支援学級に限らず、発達障害の可能性のある生徒が増加している通常学級でも常に意識しておきたいところである。

教科指導における専門性については、中学校だから中学校のことだけを理解しておけばよいということではなく、広く特別支援学校や小学校にも目を向けて実践に取り組む必要がある。今回の実践では、筆者の３０年以上に及ぶ中学校での実務経験からだけではなく、特別支援学校学習指導要領を参考にしたり、小学校での外国語科指導方法などからも多くを取り入れた。若手教員にとっては、この点は自覚的に研鑽を積む必要があるだろう。

一方で、特別支援教育に関する専門性については、筆者も含めて十分身についているとは言いがたい。特別な支援を必要としている生徒たちに接するときに、その専門性はますます求められるであろう。なぜなら、万が一関わり方を誤れば生徒の能力を引き出すことはおろか、生徒の意欲や自己肯定感を育てることにも失敗してしまう危険性をはらんでいるからである。公立中学校に勤務する教員には今後も様々な専門性が求められていくであろう。これからも幅広い内容の研修が必要であり、また自己研鑽に励むことも求められる。

引用・参考文献

岡英夫・金森強（編）（2010）『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として－[改訂版]』，株式会社成美堂，pp.43-52

酒井秀樹・滝沢雄一・亘理陽一（編）(2017)『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ　小学校外国語科内容論』，三省堂，pp.166-173

月森久江(2008)『シリーズ教室で行う特別支援教育６　教室でできる特別支援教育のアイデア小学校編 Part ２』，図書文化社，東京

松本　敏治、崎原　秀樹、菊池　一文(2015)「自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈－言語習得から方言と共通語の使い分けまで－」，『弘前大学教育学部紀要』，p.97

文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編

文部科学省(2017)小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編

文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説　外国語編